



今日から伊那弥生ヶ丘高校校長通信を始めます。通信の発行は不定期です。教育の状況、学校のこと、校長の考えや願い、生徒・保護者の皆さんへのお知らせ等々を記載していきたいと考えています。初回は、いつかは生徒の皆さんにお伝えしたかった校歌のことから始めます。

一、天に 雲生む 仙丈と
呼び合う 西駒 伊那の空
友よ 悔いなき 青春を
この丘に 求め
いのち 磨く
われらの胸に 照る光

二、春は 弥生の あけぼのに
夢あり 桜の 花万葉
高き望みの 薫るとき
溢れくる うたよ
和して ひびけ
天竜 遠く 海をさす

三、大樹 森なす 学びやの
窓辺に 湧き立つ 若き風
知徳兼ねつつ たくましく
開きゆく 未来
自主の 道よ
日輪もまた 今燃えて

本 校校歌の作詞は宮澤章二さんです。作曲は「めだかの学校」や「小さい秋見つけた」などを作曲した中田喜直さんです。同窓会誌「八十年の歩み」には、「中田さんの従姉妹の娘が本校2年生に在学していた縁で先に作曲者が決まり、中田さんの推薦で作詞者が宮澤さんに決定した」とあります。

宮澤章二さんは、埼玉県に生まれ、高校の教諭時代に、詩人・作詞家として活動を開始し、校歌や合唱曲、童謡などの作詞を多数手がけました。そんな宮澤さんが校歌をつくった思いが、「八十年の歩み」に記されていたので紹介します。

校歌作詞にあたって、昭和52年9月12、13日の両日、本校に訪れ、先生方や生徒代表者との話し合いの中から、宮澤さんご自身が本校関係者の一人（校友の一人、教師の一人、生徒の一人）になったような心境の中から校歌の詞をつくっている。本校の伝統に関して、精神に関して、さらに今後の方向や心構えなどに関して、作詞上参考になるさまざまな事柄を汲み取ることができた。さらに、宮澤さんはこう言っています。

「校歌は、決して、単なる教訓のうたではありません。大人が生徒に対して無理に押し付けるうたでもありません。学校の教育方針は、詩の内容として当然入りますけれど、それだけではないのです。生徒の皆さんが心から共感できるもの、とりわけ高等学校の校歌は格調の高い青春讃歌でもなければならぬ、と私は考えております。

どうぞ、まず声を出して、自分たちの歌として歌詩をお読みください。そして、皆さん自身で内容を感じ取ってください。それから希望に満ちた若々しい声を合わせて、高らかに歌ってください。そのとき、名付けようのない何かが、たぶん心のどこかに生まれてくるでしょう。それは、二度とない青春の貴重さを告げるものであり、ある日ある時、ふと自分の歩みの支えになるものであり、同じ母校に学びあう皆さんと心を結ぶものであり・・・といった生命力を持ち続ける歌になりますようお願いしつつ、私は作詞いたしたわけであります。どうぞ、この校歌に、生き生きとしたいのちを与えてください。」

校歌三番「知徳兼ねつつ たくましく 開きゆく 未来 自主の道よ 日輪もまた 今燃えて」には、日輪（太陽）は生徒の皆さんであり、本校の校是である「自主自律」の精神から学び、「今」を大切に、たくましく成長して欲しいという願いがあったのではないかと私は感じ取っています。